

研究テーマ

土佐清水市立清水小学校

「主体的・協働的に学ぶ児童の育成」

～深い学びにつながる対話と振り返りの探究～

学級数：16

児童：283

研究の概要・成果

1 研究の概要

教育課程拠点校指定事業の2年目である。昨年度は、授業の中に対話と振り返りの時間を確保していくことで、児童の聴く力や話す力、書く力の育成を図り、主体的かつ協働的な学びの実現を目指してきた。対話のスタイルや算数日記の習慣化が確立されるなど一定の成果が見られ、今年度の全国学力・学習状況調査でも、全ての科目で全国平均を上回ることができた（国語A+5.2P、国語B+12.0P、算数A+14.7P、算数B+10.9P）。一方で、目的や必然性の曖昧な「対話の形骸化」や「算数日記のマンネリ化」といった課題も明らかになったため、本年度はより効果的で必然性のある対話活動と、家庭学習や次時に活用できる振り返りの研究を進め、児童がより主体的・協働的に学びながら、深い学びの実現を目指した。

(1) 算数科研究授業（主体的かつ対話的な学びを追究する授業改善）

全教員が1回以上公開・提案・研究授業を行い、必然性のある対話と活用可能な振り返りの確立、資質・能力ベースのまとめや問いの焦点化、発問や板書の工夫改善、さらには教具の開発と活用等に努めてきた。また、教科の専門性を高めるため、笠井健一先生（文部科学省教科調査官）、齋藤一弥学力向上総括専門官、西部教育事務所指導主事を講師として招聘し、授業の課題について助言をいただきながら、主体的・対話的で深い学びに向けての教材研究や授業改善に取り組んできた。

(2) 単元構想（単元の全時間の指導案を含む）の作成と、言語活動を記載した年間指導計画の活用

今年度も新たに各学年で1単元分の単元構想（全時間の指導案を含む）を作成した。また、過去7年間に作成してきた、毎時間ごとの言語活動を記載した年間指導計画を活用して、授業展開や発問、しかけ等の工夫改善を行ってきた。

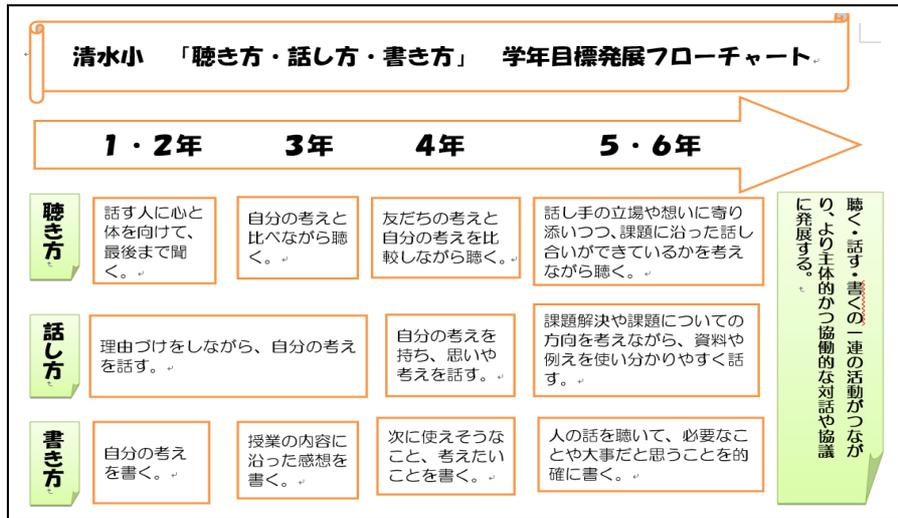
(3) 授業スタンダードの確認と徹底

4月に昨年度の成果と課題を受けて修正した今年度版の授業スタンダードに基づいた提案授業を行い、全教員に「清水小授業スタンダード」の徹底を促し、下記についての確認も併せて行った。

- ① 「聴く・話す・書く」の系統的な目標を設定し（図1）、これに基づき「聴き方・話し方・書き方の手引き」を作成。対話やグループ・全体協議をはじめとする言語活動の指針とする。
- ② 「清水小学び合いカード（低・中・高学年用）」を活用して、対話やグループ協議を充実させる。
- ③ 「算数日記スタンダード」を作成し、各学年で目標とする「質や量」と教師からの「評価の視点」等を明らかにすることで、児童と教師が効果的かつ効率的に振り返り活動に取り組む。

- ④ 算数科のノート指導について全学年で共通して行うことを4月に協議し、授業の流れや児童の思考や気づき等が見えるノートづくりを進める。

図1 「聴き方・話し方・書き方」のフローチャート



(4) 板書のデータ保存

若年教員は算数科授業の全単元毎時間分の板書、中堅・ベテラン教員は1単元毎時間分の板書を画像データとして保存していき、以下のように活用した。

- ① 若年教員は、学期末毎にデータをもとに成果と課題をレポートにまとめてきた。
- ② 中堅・ベテラン教員は年度末に成果と課題をレポートにまとめた。
- ③ 校内研・ブロック研・学年会、ノート指導実践交流などの資料として活用した。
- ④ 初任者研修、2年次研修の資料として活用した。
- ⑤ 年度末に検証結果を共有し、来年度へつなげる。

(5) 学力調査の活用

校内研修において、全教員で全国学力・学習状況調査、標準学力調査、単元テスト、高知県学力定着状況調査、CRT検査の分析結果を共有し、洗い出した課題の改善策について協議した。また、それぞれのテストで誤答が多かった問題を解き、今求められている学力観について共通理解を図った。全国学力・学習状況調査と標準学力調査は学力向上の取り組みの「P」、単元テストと高知県学力定着状況調査、CRT検査は「C」として位置付け、結果分析や取組の検証の機会を複数回設け、PDCAサイクルをまわしてきた。

(6) 思考力・判断力・表現力＝活用力の育成と検証（活用力育成シートの作成）

学力調査の分析から、本校の課題である思考力・判断力・表現力を要する問題のどこにつまずいているのかを考察し、各学年で「日々の授業」、「家庭学習」、「その他の場面」における具体的な手立てや方策を活用力育成シートにし、一覧化した。1学期末、10月、2学期末、年度末の計4回、育成シートの進捗状況を共有し、成果と課題、今後の手立て等について協議した。

(7) 算数に関わる環境づくり

① 量感を養う工夫

これまでの各学力調査結果等から見出された課題の一つである「長さ・広さ・重さ等の量感」を養うため、遠足などの行事を利用して「重さ当て」「長さ当て」等量感を養うゲームを取り入れてきた。また、多くの児童が行き交う交流ホールに量感を養う

ゲームコーナーを常設した。



②ペーパーチャレランへの参加

「ペーパーチャレラン(ゲームや迷路等の要素を含んだ計算等の問題)」に取り組めるように、算数コーナーに毎月問題と全国ランキング結果を提示した。学期が進むにつれてランキング上位や高得点を目指し、楽しみながら取り組む児童が増えた。なかには、家庭に持ち帰り親子でチャレンジする児童や、新しい問題を要求してくる児童も見られるなど、積極的に取り組もうとする姿が見られた。

③モデルノート(算数科)の提示

モデルとなる算数科のノート【自分の考え(方法・理由の説明)、友達の考え、まとめ、振り返り(適用問題)等を含む】を掲示し、ノートづくりに役立てるようにした。モデルノートは毎月更新し、同じ児童のノートが提示されないように配慮した。

(8) 家庭学習の習慣化と質の向上

学力の定着と向上のためには家庭学習が欠かせないが、今年度は「毎日家庭学習を全て提出できる児童の割合を85%以上」「予習：復習の割合が3：7」を目標として以下の取組を進めた。

- ① 毎月最終の水曜日に「家庭学習提出状況調べ」を行い、各学級の実態と全校の傾向を共有してきた。
- ② 「予習の手引き」を作成し(図2)、予習の習慣化と質の向上を目指した。
- ③ 家庭学習ができにくい児童は、放課後学習教室への参加を勧めてきた。同時に放課後学習教室の体制化を図った。
- ④ 9月に夏休みの宿題の量・質、提出状況を調べた。
- ⑤ 年度末に家庭学習における「効果的だった支援・手立て」「予習の割合を含めた成果と課題」「さらなる質の向上に向けて」について、児童の実態に基づく全教員の意見を集約し共有した。

図2(「予習の手引き」)(5年)

こなごなしてみよう!

(5年 予習のしかた)

☆授業で先生や友達と話し合い学習を進める前に、自分でひととおり学習しておく、授業が分かりやすくなり、対話もより活発になります。

<算数>

○算数日記を読み返し、明日学習する問題や内容を予想する。
○ノートに明日学習する問題文を書き写す。
・文章問題なら、分かっていること、問われていることに線を引く。
・図形問題なら、かんたんな図形をかいてみる。
・計算問題なら、数値や単位などの数値を使って、答えの見直しを立てる。
○問題の内容を考える。
・前のやり方とちがうところをノートに書く。
・解答が正しいと思ったら、そのやり方で解いてみて、教科書のやり方とどこがちがっているか比べる。

<国語>

○新しい単元の前に・・・
・音読や指写をする。
・新出漢字・難しい語句を調べる。
・感想文・あらすじを書く。
○物語のとき・・・
・場面ごとに大切な言葉や文章(キーワード、キーセンテンス)に線を引いたり、ノートに写したりする。
・接続詞(つなぎ言葉)に線を引く、場面の変化をとらえる。
・登場人物の感情や態度の変化を言葉や図で表す。
○説明文のとき・・・
・場面ごとにキーワード、キーセンテンスに線を引いたり、ノートに写したりする。
・接続詞(つなぎ言葉)に線を引く、指示語(こそあど言葉)に印をつける。
・意味段落(はじめ・なか・おわり)に分け、全体の構成を考える。
・段落ごとに見出しをつける。
・筆者の考えをまとめる。
○話し方・聞き方、作文のとき・・・
・本文だけでなく、会話や図・資料などをふくめ全体を丁寧に読む。
・大切な言葉や文章に線を引いたり、ノートに写したりする。
・実際にスピーチメモや作文などを書いてみる。

<社会>

○新しい単元の前に・・・
・新しい語句を調べる。
・教科書の資料(表やグラフ、年表、イラスト)などを読み取り、気づいたことや考えたことを書く。
・資料表をよく読み、大切なところをノートに写す。
・何を勉強するのか、課題を確かめる。
・課題に対する予想を立てる。
○地理的な学習のとき・・・
・地図帳で地名や場所を調べる。
・キーワード・キーセンテンスに線を引く。
○産業についての学習のとき・・・
・どの工場や産物のとちがいを調べる。
・人々の工夫や努力を読み取り、ノートにまとめる。
・キーワード・キーセンテンスに線を引く。
○歴史や学問のとき・・・
・次の授業に出てくる人物や場所などについて調べる。
・前後の時代背景や大きな出来事を年表で確認する。
・キーワード・キーセンテンスに線を引く。

<理科>

○新しい単元の前に・・・
・何を勉強するのか、課題を確かめる。
・新しい単元で使う、実験器具や観察器具の名前や使い方を、ノートにまとめる。
○実験や観察をするとき・・・
・次の授業の課題(はてな)とめめて予想する。
・結果を生かして学習したことと結びつけて予想する。
・実験方法や観察の手順・ポイントを予想する。
・引：何と何と関係しているかな？
・4年：何と何を関係させればいいのか？ 何が関係しているのかな？
・5年：そろそろ条件は何かかな？ かなる条件は何かかな？
・6年：実験や観察から、どんなことが言えるようになるかな？
※実験や観察の過程によっては、学習しない方がいいものもあります。理科の先生に聞くようにしましょう。

明日の授業で予習しよう!!

(9) 組織的OJTシステムの確立（若年教員の授業力向上）

若手教員（5年次未満の教員と若年講師）の授業力向上を図るため、定期的な授業観察と授業評価システムを確立した。

前者は中堅・ベテラン教員の授業を若手教員が観察し、自身の資質向上につなげることを意図したもので、1学期は週に1回以上、2学期以降は初任教員は月3回以上、2年次教員・講師は月2回以上、授業観察を行うようにした。その際、観察者である若年教員は授業観察・感想シート（図3）に記入し、その日のうちに授業者まで提出するようにした。なお、授業者や日程の調整は研究主任が行った。

後者は若手教員の授業を管理職、指導教諭、初任者担当教員、研究主任が主となり、定期的かつ計画的に観察し指導力の向上を図るもので、観察者は授業チェックシート（図4）をもとに若年教員の授業を評価した。授業後、若手教員は授業チェックシートをもとに担当や必要に応じてペアの学級担任と協議したり、それらをもとに学期末ごとに自身の授業力を振り返り、成果と課題についてレポートにまとめたりするようにした。授業チェックシートの集計とグラフ化は研究主任が行った。

平成29年度 清水小・組織的OJT
若手教員の授業力向上・改善プラン

授業観察・感想シート

記入日（ ） 記入者（ ）

教科（ ） 単元名（ ） 授業者（ ）

◎ 1、4の項目は必ず記入してください。
1 板書（なるべく忠実に写す）

2 授業展開・対話・振り返り

3 準備物・教材・発問・声かけ・支援等

4 感想（今後取り入れたいことを1つ以上明記すること。）

5 授業者からのコメント（本時で特に大事にしていたこと、アドバイス 等）

図3 （授業観察・感想シート）

平成29年度 清水小 若手教員の授業力向上改善プラン

授業チェックシート

月 日 時間 日 年 組 教科（ ） 授業者（ ）
記入者（ ）

授業中に

子どもに学習の見直しをもたせるために、授業のめあてを示す。（めあて・見直し）

1	① 学習指導要領の指導内容に基づいためあてになっている。	1 2 3
	② 子どもたちめあてをつかませ、課題意識をもたせている。	1 2 3

学習のねらい・見直しがわかるように板書を工夫する。（板書）

2	① 板書計画に基づいた板書が明確に書かれている。	1 2 3
	② 授業の流れや思考の過程がわかるように工夫している。	1 2 3

自分の考えを、根拠を基に説明させたり、書かせたりする。（教師の支援・手立て）

3	① 教科の特質を生かした方法で表現できるよう、手立てを工夫している。	1 2 3
	② 全員が課題を共に取り組めるよう、適切な支援をしている。	1 2 3

話し合いや書く活動などを通して、学習したことを整理し、考えを深めさせる。（対話・学び合い）

4	① ねらいを達成するために、対話や話し合いの目的を明確にしている。	1 2 3
	② 考えを深めたり広げたりすることができるよう、子どもたちの意見を俯瞰付けためたりしている。	1 2 3

学習したことへの振り返りの場を設定する。（振り返り）

5	① 子どもたちに学んだことやさらに考えたいことなどを確認させている。	1 2 3
	② 学習内容に有用なものがもてる適用問題や授業感想（算数日記など）を実施している。	1 2 3

日常的に（学習環境・規律）

6	学習時間を保証し、開始時刻と終了時刻をしっかり守る。	1 2 3
7	すべての子どもが過ごしやすい学校・教室環境をつくる。（すっきりした黒板周りの掲示、机・椅子の整理整頓など）	1 2 3
8	あいさつ、言葉づかい、聞く姿勢等、教師が子どもの模範となる。	1 2 3

1：実施できていない 2：実施できている 3：実施できており、学びの質も深まっている

図4 （授業チェックシート）

(10) 研究内容の普及

教育課程拠点校事業2年目の中間発表会とこれに先立っての公開校内研修会を行った。5月の公開校内研修では市内外の教員や関係者の参加のもと、2クラスの公開授業・研究協議・講演（『深い学びにつながる対話と振り返りの探究の在り方』講師：笠井健一調査官）等を実施した。11月の中間発表会では市内外63名の教員、関係者参加のもと、習熟度別コース含む3クラスの公開授業、研究協議、講演（『深い学びを目指した授業改善の方向性 ～新学習指導要領をもとに～』講師：笠井健一調査官）等を実施し、取組の普及に努めた。10月には西部地区の第2回学力向上研究主任会で、本校の教育実践とその成果と課題等について広く紹介することができた。また、HPにて、今年度の取組を学期に1回程度更新し、情報発信を行った。

(11) 視察研修

○香川大学附属高松小学校 平成30年2月1日(木)、2日(金) 4名参加
研究テーマ「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」
～子どもの育ちを保証する2領域カリキュラムの指導と評価～

集団→方法→内容→目的の4層構造からなる2領域(教科学習と創造活動)カリキュラムの指導と評価の実践研究を通して、学びに没頭し、自ら学びを再構築できる児童の育成を進めていた。特に教科学習における学びの再構築を実現させるための様々なしかけや発問が系統化されており、今年度の取り組みの中で主体的・協働的な学びを仕組むための発問やしかけが課題として見出された本校にとって、大いに参考になる内容であった。来年度の本校の校内研修の柱の一つに、この発問やしかけの工夫・改善を位置付けたいと考えている。

2 研究の成果

(1) 学力調査における検証

① 6年生児童の検証

下記のグラフは、全国学力・学習状況調査及び高知県学力定着状況調査(算数科)

の結果である。

図1 (平成29年度全国学力・学習状況調査)

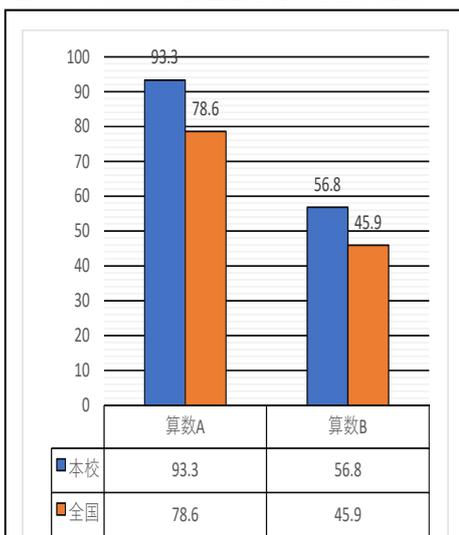
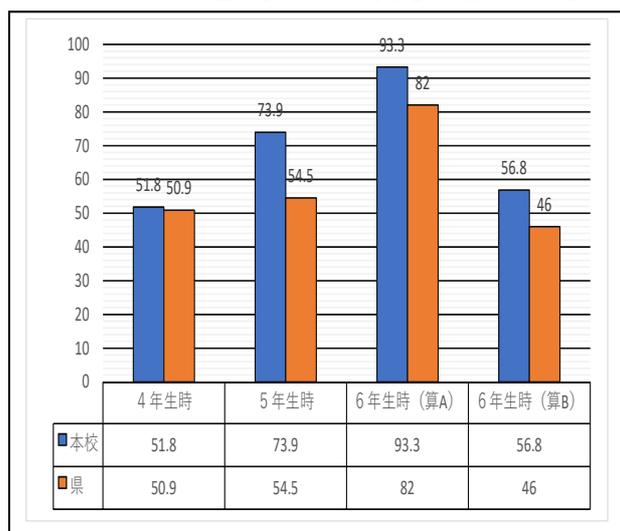


図2 (現6年生の4年生時からの県平均との比較)

※4・5年生時は高知県学力定着状況調査での比較



本年度の6年生は、全国学力・学習状況調査において算数A・Bとも全国と県平均を10p以上上回り、目標(+3p以上)を大きく超えることができた(図1・2)。4年生の1月の段階では県平均とほぼ同等だったことから、教育課程拠点校事業の1年目であった昨年度からの取組により、基礎基本と活用力がバランスよく育成され、着実に児童の学力向上を促してきていると言える。

また、全国調査の質問紙による算数科の関心・意欲に関わる質問では、昨年度同様に肯定的評価が全国平均を上回っていた。

Q1「算数の授業で新しい問題に出合ったとき、それを解いてみたいと思いますか」肯定的評価81.4%(全国75.7%) → +5.7

Q2「算数の授業の解き方が分からないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」肯定的評価86.1%(全国81.1%) → +5.0

他に「算数の勉強が大切だと考えている」児童や「算数の勉強は好きだ」と感じている児童も全国に比べて多かった。さらに、昨年度全国平均を下回っていた

「問題を解く時、もっと簡単な解き方を考えている」の肯定的評価が90%を超え、全国平均を9.3上回った。

② 4・5年生児童の検証

高知県学力定着状況調査の5年生の結果は62.7%（県平均51.4%）4年生の結果は44.0%（県平均44.2%）で、5年生は目標（+3p）を大きく達成できたが、4年生はわずかに及ばなかった（図3）。

しかしながら、必然性のある対話と活用可能な振り返りを重視した授業改善や、ノート指導の徹底により、自分だけでなく、友だちの説明もノートに書き足したり、自分の言葉で伝えたりする活動を積極的に取り入れたことで、「記述問題における説明力」の改善が進み、記述問題の正答率が、ほぼ県平均を上回った（表1）。

図3（平成29年度高知県学力定着状況調査における県平均との比較）

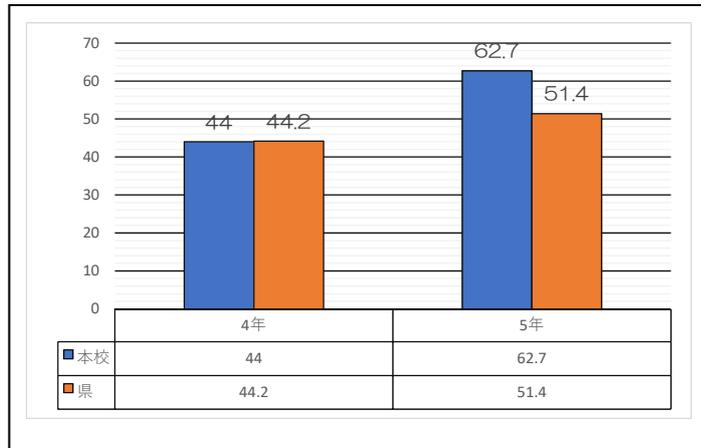


表1 平成29年度高知県学力状況調査の記述式問題における正答率と無解答率の結果

【4年】

設問番号	本校正答率 ()は無解答	県正答率 ()は無解答
6 (2)	20.8 (6.3)	12.7 (13.8)
13 (2)	4.2 (6.3)	4.2 (20.3)

【5年】

設問番号	本校正答率 ()は無解答	県正答率 ()は無解答
5	37.5 (5.4)	30.5 (8.7)
6 (1)	19.6 (5.4)	8.0 (4.0)

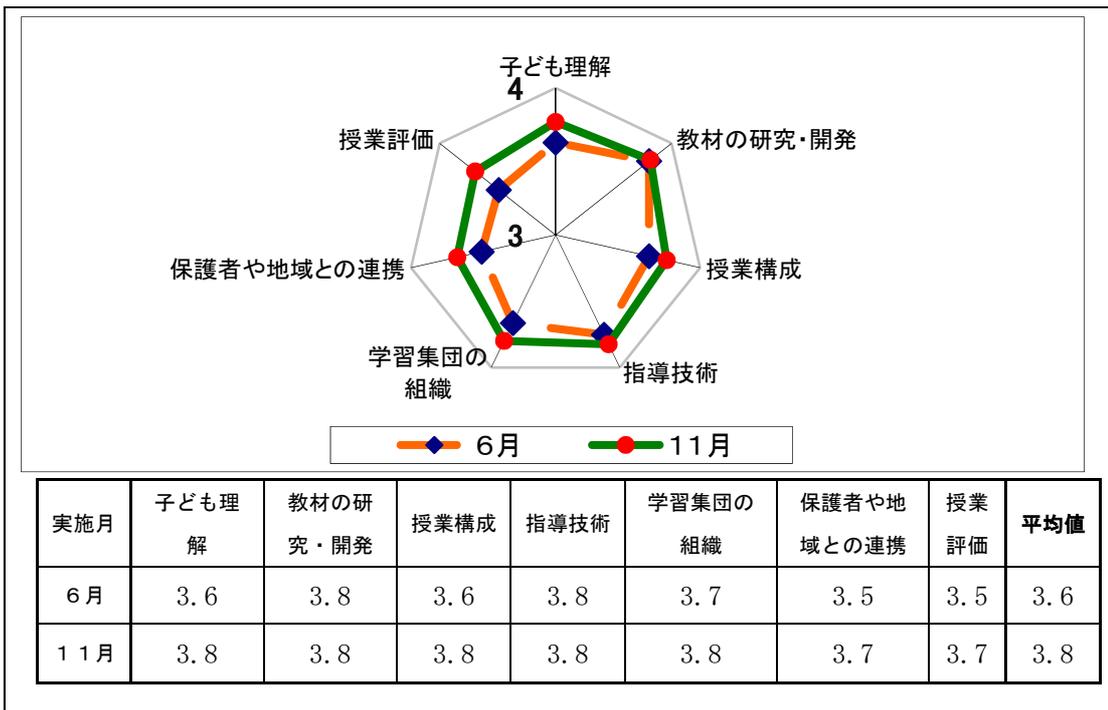
・4年の正答率は県平均よりわずかに下回ったが、記述問題の正答率は県平均並みかそれ以上で、無回答率はかなり低くなっている。最後まで粘り強く、積極的に取り組む姿勢が身に付いている。

・記述問題の正答率は県平均より高いとはいえ、決して楽観できる値ではない。特に、複数の情報や既習の知識・技能を基に、複数の手順を要して答えるような問題を解くことに弱さがある。学習過程の中で、比較・分類・整理したり、統合・確認したりする活動を継続して取り入れていく必要がある。

(2) 授業力診断シートにおける検証

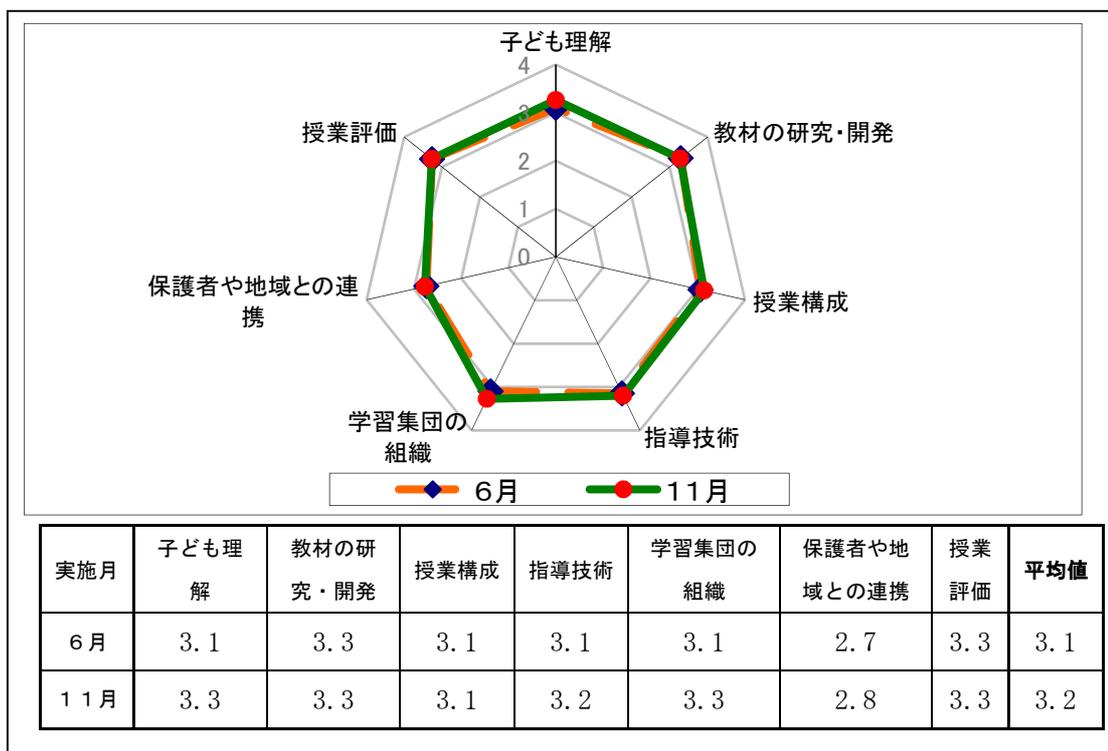
① 児童における検証

図4 (児童用・授業力診断シートの結果)



② 教師における検証

図5 (教師用・授業力診断シートの結果)



③ 考察

- ・ 児童・教師とも全ての項目で伸びが見られた。特に、児童評価は2回とも学校経営計画で設定された目標値（3.5p以上）を上回ることができた。
- ・ 児童評価と教師評価で隔たりが大きく、教師ができたと思ったことは児童もできたと感じ、逆に教師ができていないと思ったことは児童もできていないと感じることが、児童の視点や立場に立った授業評価・授業改善につながる。

- ・「保護者や地域との連携」の項目は3.0pに届いていなかったため、授業と家庭学習のリンク化や生活との関わりをより一層深めさせていく手立てが今後の課題である。

(3) 授業評価アンケートにおける検証（中間発表における授業参観者からの評価）

Q1 「必然性のある対話活動が行われていましたか」：肯定的評価（65%）

Q2 「次時につながる振り返りが行われていましたか」：肯定的評価（80%）

対話活動に対する肯定的評価が低く、対話の取り入れ方の改善や児童の関わり合いの質の向上を目指す必要があるといった意見が見られた。対話の「必然性」の定義について再度見直す必要がある。また、振り返りについては、適用問題や算数日記に取り組み時間を確保した授業構成や、生活に結び付く活用問題を取り入れていることに高い評価が見られた。今年度の取組を客観的に検証し、課題を見出していく上で重要な資料となった。

(4) 学校評価アンケートによる検証

① 児童アンケート結果（肯定的評価）

- ・「学校生活が楽しいですか」：96%
- ・「自分の学級が楽しいですか」：96%
- ・「授業（全教科）がよく分かりますか」：95%
- ・「授業（算数科）が楽しいですか」肯定的評価：92%

② 保護者アンケート結果（肯定的評価）

- ・「お子さんは学校生活に満足していますか」：94%
- ・「先生は分かりやすい授業（算数科）に努めていると思いますか」：94%

児童・保護者共に、算数科を含む授業づくり等の全般に関して、高い評価が得られた。いずれの項目も昨年度と同等かそれ以上になっており、昨年度90%に届いていなかった児童評価の「授業（算数科）が楽しいですか」も目標値を達成することができた。

(5) 必然性のある対話と活用可能な振り返りを重視した授業づくりについてのアンケートにおける検証

今年度も昨年度に引き続き、学期末ごとに教員に授業改善や授業スタンダード・算数的環境づくり等に関するアンケートを実施し、それぞれの取組の検証を行い、今後の手立てや施策について協議してきた。

表2 「授業改善についてのアンケート結果」抜粋

項目	学期	どちらかとい			合計
		はい	いえ、はい	いえ、いいえ	
ねらいや意図が明確な対話を、効果的に取り入れることができた。	1	0	17	1	18
	2	1	14	1	16
	3	2	12	1	16
次時や家庭学習に活用できる振り返り（適用問題・算数日記）を実施できた。	1	1	9	6	17
	2	3	11	2	16
	3	3	11	1	16
スタンダードに沿った授業を実施できた。問題→めあて→見通し→自力解決→対話→全体→まとめ→振り返り	1	7	9	0	17
	2	11	5	0	16
	3	11	4	0	15

(6) 算数ノート実践交流における検証

ノート指導の徹底と充実を図るため、標準学力調査で評定1であった児童のノートを持ち寄り、ノート指導の実践交流を行った。標準学力調査を受けていない1年生は気になる児童のノート、6年生はモデルとなるノートを提示し、6年間で目指すべきゴール像を明らかにすることをねらった。どの学年でも全体で確認した算数科ノート指導のマニュアル通りの指導が徹底されており、字や図などの雑さは若干あるものの、授業の流れや自分や友だちの思考の流れが分かるノートづくりが行われていた。

(7) 家庭学習提出状況調べにおける検証

毎月末に各学級の家庭学習の提出状況を集計し、校内研修の場で結果を共有してきたことから、以下の成果が挙げられる。

- ・12月以降、「毎日全部提出」の割合が90%を超えるようになった。
- ・一年間を通して全校の「毎日全部提出」の割合を80%以上で維持できた。

一方で、特定化された家庭学習に取り組みにくい児童の改善がなかなか進んでいない現状がある。また、個別に見ると目標値に届いていない学級もあるなど、さらなる手立てや支援の工夫・改善が求められる。

(8) 活用力育成シートにおける検証

① 成果（抜粋）

- ・少人数で対話させたり、討議させたりすることで、聞き手を意識して話せるようになってきたり、根拠となる理由もまとめて言えるようになってきたりしている。
- ・発表に対して自分の考えを述べ、伝えることを通して、話す力が高まってきている。
- ・書くことを通して、自分の考えを確かなものとするを継続して行った結果、発表力の向上につながったり、必要な情報を見つけ文章化したりすることに慣れてきている。

② 課題と来年度へ向けて（抜粋）

- ・学習意欲や既習を活かして問題に取り組むという学び方については向上が見られたが、来年度は思考力（多様な考え方）・表現力（考え方をノートに分かりやすく整理する、聞き手に分かりやすい説明をする力）を高めることで活用力の向上を目指したい。
- ・活用力の育成は長期的な視野で育成していくことが肝要である。短期的・長期的プランを来年度当初に掲げ、児童の実態に応じてより効果的に対応していく。

(9) 若年教員による授業力向上レポートにおける検証

組織的OJTの一環で、若年教員は授業チェックシートの集計結果をもとに自身の授業づくりの成果と課題について、学期末ごとにレポートをまとめた。それらの中から以下のような改善点や今後の取組が見出された。

- ・めあて、見通しの段階では既習事項を使うことや困り感を与えることを意識し授業に取り組むたい。
- ・教材研究に力を入れ、児童が分かりやすい発問や思考を繋げるような発問をしたり、児童が話したいと思うタイミングに対話を取り入れたりする。
- ・自力解決や対話をすべて児童の力に委ねるのではなく、一人一人が自分の考えを持ち、対話に参加できるように促していくことが大切である。
- ・形式的に対話を仕組むのではなく、必然性のある対話のポイントを教師が把握しておく必要がある。
- ・板書に児童の考えを反映させ、分かりやすい構造的な板書を目指す。

3 課題とその改善策

今年度の全国学力・学習状況調査の結果から、6年生の学力について目標以上の成果が見られた一方で、説明を要する記述問題や複数の手順を要する問題に対して依然課題があることが明らかになった。また、それぞれのアンケート調査や実態調査でも今年度の取組の課題や改善点が洗い出された。教員が明確な課題意識を持ち、組織で具体的な取組を進め、出来具合の検証を重ねていきながら、今後も以下の具体的な課題改善策について、チーム清水小としてPDCAをしっかりと意識し、確実かつ臨機応変に取り組んでいく必要がある。

(1) 進捗状況の確認を定期的に行い、校内で課題を共有し取組を進める

- ① 1時間毎の学びの状況の確認（適用問題・算数日記等）。
- ② 単元毎や1学期毎の学びの状況の確認（市販テスト、単元テスト等）。
- ③ 既習内容の定着状況の確認（算数シート、単元テスト（フォローアップ、チャレンジ含む）等）
- ④ 長期的な定着状況の確認（各種学力調査等）
児童の学力の状況を定期的に確認し、担任だけでなく学校全体の課題として取組を進めていく。

(2) 思考力・判断力・表現力を伸ばす

活用力育成シートで明らかになった成果と課題に基づき、より具体的かつ効果的に課題克服に向けて取り組んでいく。校内研修で複数回進捗の確認と検証の場・機会を確保していくと同時に、授業の中で、お互いの考えや気づきを伝えたり、書いたりする時間を増やすこと、家庭学習や加力指導に活用力育成の問題を取り入れることを継続していく。

(3) 主体的で必然性のある対話活動の構築とそのための発問やしかけの工夫・改善

対話によりお互いの考えを伝え合い、深め合う活動が、教師にも児童にも定着してきた。今後は、対話やグループ討議をさらに充実させ、深い学びを達成していくために、対話の目的や必然性、タイミングなど実践研究を継続し、児童が進んで聞きたくなる・伝えたいとなるような発問やしかけ等の工夫・改善に重きを置いていく。

(4) 算数日記による振り返り活動の充実

授業の中に確実に算数日記を取り入れていくだけでなく、授業のねらいや評価規準の達成に向けて効果的な振り返りができるように算数日記のスタンダードの見直しを行う。また算数日記を予習や次時につなげるなどの活用法についての研究と実践を進めていく。

(5) ノート指導の徹底と充実

【自分の考え（方法・理由の説明）、友達の考え、気づき、自主的なメモ、まとめ、ふり返り（適用問題・算数日記）等】が、しっかりノートに書けるようにするために、今年度保存してきた板書データを有効に活用していく。また、ノート指導の定期的な実践交流を継続し、毎月モデルノートの展示による啓発も続けていく。

(6) 家庭学習の質の改善

更なる学力の定着と学習意欲の向上に向けて、「家庭学習の手引き」「自主学習の手引き」「予習の手引き」に加筆修正を加えながら、家庭学習の質と量について見直しを行っていく。また、放課後学習教室の体制化と充実化を進め、家庭学習が難しい児童を積極的に参加させることで、家庭学習の習慣化を図る。来年度は年間を通して「毎日家庭学習を全部提出できる」児童の割合90%以上を目指したい。

(7) 組織的OJTの改善

授業観察、授業評価による若年教員の授業力向上を図る組織的OJTの確立ができた一方で、若年教員への負担が増える結果となった。そこで、授業観察シートの簡略化や授業観察の頻度の見直し、月により集中プランを組むなどの、負担軽減と効率化を目指した改善策を施行していく。

※その他、研究の取組については別に添付すること。（様式は拠点校で定める。）

※加配教員の活用については別葉とすること。

4. 年間事業経過

月	取組の内容		
	校内における取組（組織づくり・校内研修等）※内容・講師名等記載	公開授業研・研究発表会等 ※内容・参加者数等記載	先進校視察・県連絡協議会等 ※行き先・視察の概要等記載
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修計画・研究主題・研究組織等の決定 ・研究授業の進め方と指導案様式の提案 ・清水小授業スタンダード・提案授業5年1組「数のしくみを調べよう」 ・全国学力・学習状況調査（以下全国学テ）自校採点分析結果報告 ・「聴き方・話し方・書き方」「家庭学習・自主学習」の手引きの提案 ・ノート指導の共通確認 ・家庭学習提出状況調べ① 		
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・活用力育成シートの提案 ・組織的OJTの提案 ・特別支援学級公開授業（なかよし1「自立」、なかよし2「国語」、なかよし3「自立」） ・講師招聘研：公開校内研・事前研（講師：西部教育事務所・村上克仁指導主事、同・深原純一指導主事） ・第1回公開校内研修 公開授業・研究協議 講演「深い学びにつながる対話と振り返りの探究の在り方」（講師：文部科学省・笠井健一調査官、西部教育事務所・村上克仁主事、同・吉岡身佳指導主事） ・全国学テの問題分析 ・成果物の確認 ・家庭学習提出状況調べ② 	公開校内研修 <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業と研究協議「ひき算のしかたを考えよう」（2年1組） 「わり算のしかたを考えよう」（4年2組） ・講演 ※校外参加15名	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回公開校内研修のふり返し ・第1回ノート指導実践交流会 ・算数日記スタンダードの見直し ・学力向上総括専門官による基幹となる学校への訪問（講師：齋藤一弥学力総括専門官） ・標準学力調査（以下標準学テ）の分析についての提案 	公開授業 <ul style="list-style-type: none"> ・全学級で算数科の授業 ・協議・講話 	第1回学力向上研究主任会（於：黒潮町ふるさと総合センター） 授業改善を意識した組織的・効果的な校内研究の実施に向けて研修会

	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回授業力診断シート実施 ・年間カリキュラムについての協議 ・家庭学習提出状況調べ③ 		
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・標準学テ分析・考察結果と今後の手立てについての協議 ・単元テスト結果報告と問題分析① ・活用力の課題を明らかにする研修会 ・「聴く・話す・書く」力の進捗状況の確認 ・放課後加力指導計画の見直し ・算数科ブロック研① ・家庭学習提出状況調べ④ 	<p>算数科ブロック研①</p> <p>「形も大きさも同じ図形を調べよう」 (5年2組)</p>	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程年間指導計画(1学期分)の検証 ・第1回授業力診断シートの結果分析 ・単元構想・適用問題の作成 		
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・全国学テの分析結果の考察と今後の取り組みについて ・中間発表会事前研①(指導案検討) (講師:西部教育事務所・村上克仁 指導主事、同深原純一指導主事) ・中間発表会事前研②(模擬授業) (講師:西部教育事務所・村上克仁 指導主事、同吉岡身住指導主事、同深原純一指導主事) ・算数科ブロック研②③ ・家庭学習提出状況調べ⑤ 	<p>中間発表会事前研・模擬授業</p> <p>「ひきざん」(1年1組) 「はしたの大きさの表し方を考えよう」 (3年1組) 「比例をくわしく調べよう」 (6年1組ぐんぐんコース) (6年1組じっくりコース)</p> <p>算数科ブロック研② 「ひっ算の仕方を考えよう」(2年2組)</p> <p>算数科ブロック研③ 「かけ算のしかたを考えよう」(3年2組)</p>	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・オンデマンド研修 ・「聴く・話す・書く」の中間検証 ・活用力育成シートの中間検証 ・第2回ノート指導実践交流会 ・算数科ブロック研④ ・家庭学習提出状況調べ⑥ 	<p>外国語コアエリア公開授業</p> <p>「クイズ大会を開こう」 (5年1組) ※郊外参加7名</p> <p>算数科ブロック研④ 「たしざん」(1年2組)</p>	<p>第2回学力向上研究主任会 (於:黒潮町ふるさと総合センター)</p> <p>授業改善を意識した組織的・効果的な校内研修の取組の成果と課題と今後の計画を明らかにするための研修会</p>

11月	<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表会 公開授業・研究協議 講演「深い学びを旨とした授業改善の方向性 ～新学習指導要領をもとに～」 (講師：文部科学省・笠井健一調査官、高知県教育委員会・神岡真紀指導主事、西部教育事務所・村上克仁指導主事、同・吉岡身佳指導主事、同・深原純一指導主事) ・中間発表会の成果と課題の共有 ・第2回授業力診断シート実施 ・算数科ブロック研⑤⑥ ・家庭学習提出状況調べ⑦ 	<p>中間発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業と研究協議 「ひきざん」(1年1組) 「はしたの大きさの表し方を考えよう」 (3年1組) 「比例をくわしく調べよう」 (6年1組ぐんぐんコース) (6年1組じっくりコース) ・講演 ※校外参加者63名 <p>算数科ブロック研⑤ 「新しい計算を考えよう」 (2年2組)</p> <p>算数科ブロック研⑥ 「面積のはかり方と表し方」(4年1組)</p>	<p>西部地区数学授業改善研究協議会(於：四万十市立中村中)</p> <p>中村中教員による公開授業と齋藤一弥総括専門と清水静海帝京大学教育学部教授による講演「高知の算数・数学の未来を創る～今、数学の学びをいかに描くか～」</p> <p>学力向上総括専門官による基幹となる学校への訪問事業(於：四万十市立具同小)</p> <p>齋藤一弥総括専門による提案授業と具同小教員による公開授業、研究協議</p>
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程年間指導計画(2学期分)の検証 ・単元テスト結果報告と問題分析② ・第2回授業力チェックシートの分析 ・家庭学習提出状況調べ⑧ 		
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科授業研究(第3回公開校内研)事前・事後研 ・高知県学力定着状況調査の分析と今後の取組について協議 ・家庭学習提出状況調べ⑨ 	<p>公開校内研修 「資料の特徴を調べよう」 (6年2組ぐんぐんコース) (6年2組じっくりコース) ※校外参加者0名</p>	<p>学力向上総括専門官による基幹となる学校への訪問事業(於：四万十市立具同小)</p> <p>具同小教員による公開授業、研究協議と齋藤一弥総括専門官による講話</p>
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程年間指導計画(1年間)の検証 ・先進校視察とその報告 ・CRT検査の結果報告 ・校内研総括 ・成果物の集約(単元構想、適用問題、活用力育成シート 他) ・家庭学習提出状況調べ⑩ 		<p>香川大学附属高松小学校 研究テーマ「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」～子どもの育ちを保証する2領域カリキュラムの指導と評価～に基づく公開授業の参観と研究協議への参加</p>
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度の取組に向けて(重点課題等) ・家庭学習提出状況調べ⑪ 		

※公開校内研修は校外に案内する会

加配教員の活用（別葉とすること）

学校名 土佐清水市立清水小学校

校長名 筒井 広実 印

具体的な
取組状況

- (1) 研究の中心的役割を担い、算数科における教科経営計画をよりよく改善していくための推進役を務めた。各成果物の点検や集約を行い、これらの活用について提案できた。
- (2) 研究テーマに沿った授業づくりに重点を置き、理論と実践の取り組みを行う推進役を務めた。4月に今年度の授業スタンダードに基づく算数科の提案授業を行い、スタンダードに沿った授業展開の在り方や事後研の持ち方等について協議・確認する機会を設けた。また、「聴き方・話し方・書き方の手引き」「清水小学び合いカード」「算数日記スタンダード」の見直しを5月に提案し、より効果的な活用方法について研究を深めることにつなげることができた。深い学びにつながる授業構成を旨とした授業研究の在り方や、必然性のある対話や活用可能な振り返りの確立に向けての研究を進めた。1月には6年担任と連携して、6年算数の習熟度別研究授業を公開し、今年度の授業改善の総括を行うとともに、事後研では来年度から取り組みたいこと（教師の発問と児童の反応を時系列でカード化する、教師の説明する時間と児童が思考・活動している時間を計測する、深い学びに迫る主要発問について協議する等）を試行した。
- (3) 学力調査や単元テストの結果について、研究部や各学年で分析・考察したものを提供し、課題の共通理解を図った。また、児童の学力向上の状況について、授業力診断シート、授業評価、学校評価等のデータを基にした資料の作成及び提案を行い、それぞれに設定している到達目標を校内研修で検証し、共通認識を図った。
- (4) 5年生の算数科を中心に習熟度別少人数指導、TT指導を担当した。その際、学級担任と連携し、児童の実態や学習状況等について情報交換を行いながら、習熟度別少人数指導をしたり、TT指導に切り替えたりなど柔軟に学習形態を工夫した。授業構成の見直しや家庭学習や放課後加力指導の課題やテキストの作成なども、学級担任と協力して行い、児童の基礎学力の定着と学力の向上を図った。また、模範授業や提案授業及び助言等を行ったりしながら、若手教員の育成や組織全体の意識改革を図った。
- (5) 日常的に算数科における授業改善を進め、特に児童が「主体的・協働的に学習に取り組める」ための教具の工夫や教材作成、資料づくりを中心となっていた。また、算数科授業の板書データ保存に取り組み、若年教員は全単元毎時間、中堅・ベテラン教員は1単元毎時間分の板書をデータ保存し、それらに基づくレポートを作成したり、教材研究やノート指導等の際に活用したりできるようにした。さらに、校内・教室の掲示物などの算数に関する環境づくりを積極的に行ったり、毎月モデルノートの更新やペーパーチャレランの問題準備や集計、結果報告を行ったりした。2学期には多くの児童が行き交う交流ホールに、量感を養うゲームコーナーを設置した。
- (6) 先進的な取組や、効果的な取組をより多く取り入れるために、視察や研修会に積極的に参加したり、多くの教員がそれらに参加できる体制づくりを進め

たりしてきた。視察や研修会に参加後は、校内研修の中で伝達講習の場を設けたり、研究部だよりで紹介したりして、組織的OJTの取組をさらに活性化し、教員の授業力の向上を図った。今年度は2月には香川大学附属高松小を4名で視察した他、四万十市立具同小における「学力向上総括専門官による基幹となる学校訪問」、同市中村中における「西部地区数学授業改善研究協議会」へ参加した。

(7) 教育課程拠点校として、5月に2学級2コースの公開校内研修会と11月に3学級4コースの中間発表会を行った。中間発表会では、市内外63名の教員や関係者の参加のもと、公開授業・研究協議・講演等を実施し、それまでの取り組みの成果と課題について広く意見を集めることができた。また、10月に行われた第2回学力向上研究主任会において、本校の取り組みとその成果と課題について報告・協議する機会が与えられ、西部管内の全小中研究主任や関係者を対象に研究実践を問うことができた。特に本校が力を入れているPDCAのC=検証の徹底については高い評価を得ることができた。

(8) 思考力・判断力・表現力=活用力の育成を目ざし、学年ごとに各種学力調査結果をもとに目指すゴール像と児童の実態を明らかにした上で、「日々の授業」、「家庭学習」、「その他の場面」で取り組んでいく内容を活用力育成シートとして一覧化した。学期末と10月の計4回、進捗状況と成果・課題、今後の手立て等について検証した。

(9) 家庭学習の習慣化と質の向上に向けて、「家庭学習提出状況調べ」を4月から毎月行い、各学級の実態を共有できるように、集計結果と変遷を提示した。また、「家庭学習の手引き」「自主学習の手引き」に基づいた家庭学習を推奨しながら、家庭学習における予習：復習の比重が3：7になることを目指して、「予習の手引き」を作成し、その活用を促してきた。

(10) 基礎学力の定着と活用力の育成を目的として、担任だけの加力指導に加え、管理職、少人数指導担当、児童支援担当、学習支援員等複数の教員が加わっての加力指導を実施した。また、11月と12月は4年生と5年生、1月～3月は5年生に限定して「加力強化月間」とし、週2日（火・木）放課後に、算数・国語シート、活用問題のプリントや過去の調査問題等を用いて加力指導を行った。この期間は、管理職・少人数指導担当は4年生、5年生に集中して関わるように設定した。

(11) 若年教員の授業力向上を図る取組として、5年次未満の教員を対象に、管理職と指導教官、研究主任、初任者担当が主となって若年教員の授業を評価する「授業評価システム」と、若年教員が1学期は週1回以上、2学期以降は月2～3回程度、中堅・ベテラン教員の授業を観察する「授業観察システム」を体制化した。「授業評価」では授業力チェックシートを基に評価し、研究主任がその都度集計した。若年教員は学期末にその集計結果をもとにレポートを作成することにした。「授業観察」では観察シートを基に観察し、授業者と意見交換できるようにした。授業者については週始めに研究主任が交渉し、級外教員

	<p>が補充にあたった。算数だけでなく、国語や道徳、理科、体育等多岐に渡って観察できるように配慮した。</p> <p>次年度からも講師を招聘し、授業研究を中心に校内研究を充実させ、児童が主体的かつ協働的に学び合う授業づくりを目ざしていく。そのためにも、本年度の課題を精査したうえで、取組や方向性を明確にして研究を推進していく。</p>
<p>達成目標の到達度</p>	<p>◎「研究主任として、授業参観を行うなどして取り組み状況を把握し、PDCAサイクルによる研究推進役としての役割を果たしながら、本校の授業スタイルと若年教員の授業力向上システムを確立する。」</p> <p>◆達成度</p> <p>各学年で、単元構想（単元の全時間の指導案を含む）や活用力育成シート、算数日記スタンダードの成果と課題等の成果物の作成や、算数科授業の板書データの活用、組織的OJTによる若年教員の授業力向上を図る体制の確立等、研究テーマの実現に向けて組織的な取り組みを進めた。また、校内研修で各学級の実現に向けて組織的な取り組みを進めた。また、校内研修で各学級の実現に向けて組織的な取り組みを進めた。また、校内研修で各学級の実現に向けて組織的な取り組みを進めた。また、校内研修で各学級の実現に向けて組織的な取り組みを進めた。</p> <p>(1) 達成目標Ⅰ</p> <p>「深い学びにつながる主体的で必然性のある対話と振り返りの探究を通して算数科の授業改善を図り、主体的かつ協働的に学ぶ児童を育て、3学期に行われる高知県学力定着状況調査や次年度の全国学力・学習状況調査等において県・全国平均＋3ポイント以上とする。また、標準学力調査算数科（2～5年）において、評定1の児童20%未満とする。」</p> <p>◆ 目標Ⅰの達成度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高知県学力定着状況調査の結果…目標を一部達成 4年生：算数 44.0%（県平均 44.2%）→ -0.2 5年生：算数 62.7%（県平均 51.4%）→ +11.3 ・標準学力調査の結果（算数）…目標を一部達成 2年生：6.7% 3年生：28.6% 4年生：28.6% 5年生：13.6% 2～5年生の平均：19.4% <p>(2) 達成目標Ⅱ</p> <p>「授業公開を積極的に行い、校外への提案授業や実践報告（3回程度）をする。」</p> <p>◆ 目標Ⅱの達成度…目標を達成</p> <p>研究発表会や公開校内研修等で、必然性のある対話と活用可能な振り返りを目指した授業公開（模擬授業含む）を行うことができた。また、西部地区の第2回学力向上研究主任会で本校の取組について発信することができた。</p> <p>(3) 達成目標Ⅲ</p> <p>「対話につながる聴き方・話し方の手引きや学び合いカードの工夫・改善（年2回以上）や、根拠をもとに自分の考えが書いているかどうかの検証を定期的に行い、清水小の対話的な学びのスタイルを確立する。」</p> <p>◆目標Ⅲの達成度…目標を一部達成</p> <p>年2回以上の工夫・改善はできなかったが、5月に各学年の児童の実態と各</p>

担任の想いを基に、昨年度改訂した「聴き方・話し方・書き方」の手引きを見直し、毎学期末と10月に、「聴く・話す・書く」の成果と課題、今後の具体的課題を一覧表にまとめることができた。また、モデルとなるノートの提示を毎月更新したり、自分の考えや気づきがしっかり書けている算数日記を提示したりしてきた。必然性のある対話の確立については、学期末に対話についての成果と課題を各学級から出し合い、共有してきた。

(4) 達成目標Ⅳ

「適用問題・振り返りの工夫・改善を行い、成果物としてまとめる。」

◆ 目標Ⅳの達成度…目標を達成

全学年の適用問題はその時間の展開と合わせて、1単元新たに成果物としてまとめることができた。振り返りについては、昨年度作成した「算数日記スタンダード」を改訂し、より学びが次時や他教科、生活場面につながるように工夫した。また、各学年で同じ児童の4月と10月の算数日記を比較し、その成果と課題を出し合う機会を設けることができた。

(5) 達成目標Ⅴ

「授業力診断シートにおいて、児童や参観者から3.5P以上、教師自己3.3P以上の肯定的評価を得ることができる。また、学校評価アンケートにおける「授業がよくわかる」の肯定的評価を90%以上にする。」

◆ 目標Ⅴの達成度

・ 授業力診断シート

児童用…目標を達成

6月の平均結果：3.6 11月の平均結果：3.8

教師…目標を達成できなかった

6月の平均結果：3.1 11月の平均結果：3.2

・ 学校評価アンケート…目標を達成

「授業（全教科）がよく分かりますか」：肯定的評価95%

「授業（算数科）が楽しいですか」：肯定的評価92%

(6) 達成目標Ⅵ

「算数に関わる環境づくりと学習習慣の形成の達成目標は、授業アンケートや3学期に行われる高知県学力定着状況調査や次年度の全国学力・学習状況調査等の質問紙で、算数の学習に肯定的な回答を90%以上とする。」

◆ 目標Ⅵの達成度

・ 授業アンケート…目標を達成

※達成目標Ⅴ参照

・ 高知県学力状況調査・・・目標を一部達成

※達成目標Ⅰ参照

(7) 達成目標Ⅶ

「家庭学習を毎日全部できる児童の割合85%以上とする。また、予習：復習が3：7になるようにする。」

	<p>◆目標Ⅶの達成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習提出状況調べ・・・目標を達成 毎日全部提出できる児童・・・2月末で約93% ・予習と復習の比率・・・達成できなかった 2月に行った家庭学習の総括において各学級の平均値は、予習：復習が2：8。 <p>(8)達成目標Ⅷ 「HPの更新を定期的に（学期に1回以上）行えるよう担当と連携し、取り組みや成果物を発信し普及を図る。」</p> <p>◆目標Ⅶの達成度…目標を達成 学期に1回以上校内研修における取組を更新してきた。実践事例や単元構想などの成果物、研究授業の指導案等もアップできた。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>(1) 高知県学力定着状況調査結果で明らかになった課題の改善 高知県学力定着状況調査では5年生は目標以上の成果が挙げられたが、4年生は目標に届かなかった。両学年とも無回答率の低下や基礎問題の正答率の上昇など一定の成果はあるものの、重視して取り組んできた活用力を要する問題や記述問題では大きな課題が残った。活用力育成シートに基づき、活用力育成の取組を見直ししながら、児童の学力の更なる底上げを目指したい。日々の授業の充実に加え、習熟度別の加力学習にも取り組み、基礎基本の力と活用力のバランスの取れた育成と向上に努め、4月の全国学力・学習状況調査においては県平均+3P以上を目標とする。</p> <p>(2) 新学習指導要領に向けての授業づくり 教育課程拠点校として、特に算数科においては新学習指導要領の改善のキーポイントを意識して、「数学的活動」を充実させる取組を進めていかなければならない。児童が主体的・協働的に学ぶなかで、より確かな知識を身に付け、資質・能力の育成を図る授業づくりの研究を推進していく。そのためには、必然性のある対話や活用可能な振り返りを通して深い学びを実現していくためのさらなる研鑽と、教師の発問やしかけ等の工夫・改善が今後の大きな課題である。そして、清水小授業スタンダードをより質の高いものにしていく。</p> <p>(3) 校内研究の内容の充実 研究授業後のリフレクションの内容を見直し、発問や児童の反応を一覧化しながら、深い学びにつながる発問や活動に焦点をあてるとともに、教師の話す時間を極力減らし、児童が思考し、活動する時間の拡大を図る取組を実践していく。また、さらに児童の学びの質を高めていくために、来年度改めて、モデルとなるノートの内容や書き方について検討を行い、算数科ノートづくりのスタンダードを充実化させていく。それに伴い、今年度保存した算数科授業の板書データのさらなる活用を図っていく。</p> <p>(4) 学力の定着と学習意欲の向上に向けて 放課後学習教室の体制化・充実化と家庭学習における予習：復習＝3：7を目指す取組が大きな課題である。今年度作成した「予習の手引き」を再検討し、</p>

翌日の授業とリンクした家庭学習になるように内容を見直したりすることで改善を図っていきたい。また、家庭学習を毎日全部提出できる児童の割合が90%以上を維持していくことも目標に加える。

(5) 若年教員の育成に向けた組織的OJTの改善

今年度は若年教員の授業力向上を図って、組織的OJTによる授業観察・授業評価システムを確立した。若年教員のレポートにもその効果が記述されているが、若年教員や被授業観察者、或いは補充教員の負担が増えているとの指摘もあった。働き方改革の視点からも、より効果的で効率的なシステムに改善していく必要がある。チーム清水小で若年教員の資質・能力を伸ばしていく取組とその方向性は間違っていないので、短期集中プランの導入や観察・評価の視点の焦点化と簡略化（授業観察・感想シートの見直し）や観察・評価後の協議の持ち方の改善等のシステムのスリム化効率化を検討していく。

(6) 研究内容の普及と協力校への支援

近隣の小規模小学校の校内研修に参加し、提案授業や学校の取組・成果について情報発信していく。また、教材研究等にも積極的に関わり支援を行い、連携を深めていく。今年度は近隣小学校の校内研修参加ができなかった（年度途中で研究主任が学級担任になったため）ので、2学期末までには行えるようにする。HPにおいても、学期に1回以上の更新を目標に、情報を発信していく。

※ 実績報告に関する資料を添付すること。